

富士山を詠ず（柴野栗山）

誰か 東海の水を 將つて

濯い 出す 玉 芙蓉

地に 蟠まつて 三州 尽き

天に 挿んで 八葉 重なる

雲霞 大麓に 蒸し

日月 中峰を 避く

独立 原 競うこと 無く

自ら 衆岳の 宗と 為る

誰將東海水 濯出玉芙蓉  
蟠地三州盡 挿天八葉重  
雲霞蒸大麓 日月避中峰  
濁立原無競 自爲衆岳宗

解説 雲峰富士の崇高にして雄大なさまをたたえた作。

語釈 ※東海水||日本を回る海の水。 ※將||用いるの意。 ※濯出||濯い磨き出したという意味。 ※玉芙蓉||富士山頂は八峰をなし、あたかも八瓣の蓮の華に似ているところから富士の雅称となった。 ※蟠地||裾野の広がり大きさからいったもの。 大地に根を太く、たくましく広がっているさま。 ※三州||甲斐（山梨）相模（神奈川）駿河（静岡）の三国。 ※挿天||天空に高く聳えるさま。 ※八葉||八枚の花弁。 芙蓉の花弁はいまでもなく八枚。 ※雲霞||くもとかすみ。 ※蒸||わきあがる。 ※避中峰||中峰を避けて過ぎて行く。 中峰は最高峰。 ※独立||他からかけ離れて存在すること。 ※原無競||初から競争する相手などないの意。 ※自為||自然にそうなること。 ※宗||群山第一の意。

通釈 誰がいったい東海の水をもって、玉芙蓉にも似て美しい富士山を濯い出し、磨きだしたのであろうか。 裾野は遠く大地に拡がり、甲斐・相模・駿河の三国をおおい包み、頂上は遙か天空に分け入り、しかも蓮の花びらのように重なり合っている。 雲や霞は広大な裾野から蒸してわき、日や月も中央の高峰を避けて通るかのようである。 そのすつくと群山を抜いて甕える姿は、他に争うものなく、自ら衆峰のかしらとなっている。